

**富士見市文化芸術振興委員会第9回会議録**

日時	平成26年10月30日(木) 18:30~20:00
会場	鶴瀬公民館 第3集会室
出席者 (欠席者)	<p>■委員(順不同・敬称略) 加藤 健司、秋元 節子、氣賀澤 明子、小倉 洋一、佐藤 公誠、小塚 茂、増岡 昭、稲村 松美、野村 東央留、羽石 裕子、山崎 咲子、吉川 節男、吉田 英穂</p> <p>■事務局 市川地域文化振興課長、中嶋副課長、大下主事</p> <p>■研究者(順不同・敬称略) 長嶋 由紀子、中村 美帆、李 知映</p> <p>《欠席者》</p> <p>■委員(順不同・敬称略) 富田 實</p>
会議内容	<p>&lt;第8回文化芸術振興委員会&gt;</p> <p>1 開 会 地域文化振興課 中嶋副課長</p> <p>2 あいさつ 加藤委員長</p> <p>3 議 事 (1) 富士見市文化芸術振興基本計画について 事務局より、「富士見市文化芸術振興基本計画」の冊子を配布した。また、出席の委員、研究者より策定を振り返っての感想等をいただいた。</p> <p>委員よりの意見</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・丁寧に作成することができたと思う。東京大学の皆様も上手にまとめてもらった。</li> <li>・子育てをしていると視野が狭くなる。この計画によって10年後の未来で、子どもたちが良い環境の中で生活できるようになってほしい。</li> <li>・このような会議は初めて参加したが、大変勉強になった。どのようにまとまっていくのか不安だったが、うまくまとめられていると思う。</li> <li>・あまり力になれなかったかなと残念に思っている。計画は作ることが目的ではなく、これからが大切。我々もこの計画を基に、勉強していかなければならない。</li> </ul>

・文化芸術を市民は高尚なものとは一歩下がって試みている人もいると思う。この計画を基に、富士見市の文化芸術が開花すればよいと思う。計画の内容をいかにして実現するかが大切。

・自分なりに経験してきたことを意見として出し、また、意見を聞くなど、自分の立ち位置が確認できた。印象に残っているのは、中高生とのワークショップ。今後はアクションプランの策定もあり、「絵に描いた餅」にならないように、スピーディーに行う必要がある。

・「ようやく完成したか」という感じ。20年前から文化会館を作る運動を行い、キリリができて、条例も完成して計画まで完成した。色々携われて感慨深い。しかし、これからが大切。計画にもある通り、自らが進んで文化芸術を行う市民組織の立ち上げを検討しなければならない。そういう意味では10年後の富士見市が楽しみであり、心配でもある。

・文化芸術は自分が想定したよりも幅が広がった。生涯学習の団体から推薦されてきたが、基本目標2に生涯学習のことも含まれており、大変良かった。今後は、この計画を作った意義や目的をしっかりと意識して、実行していく事が大切である。

・毎回出席することができず残念。子どもたちや市民の感性、創造性が高まっていく、その基礎が出来上がったのだな、と感じている。目標にしているまちづくりを進めて行くためには、どの様な仕組みを作って進めて行くか、ということだと思う。今後はとても楽しみ。

・委員会に参加させてもらい、大変勉強になった。この計画が実行されることを願っている。

・文化芸術のことはよくわからずに参加していたが、文化芸術も含め生涯学習活動には様々な方が参加している。10年後、この方たちの活動が、更に向上していると素晴らしいと感じた。

・文化芸術は思っていたより幅が広く奥が深かった。大変勉強になった。

・条例が制定され、計画も策定され、一定の到達をみた。文化芸術は一人ひとりの感性を豊かにするものだと思っている。特に若い人たちに体験してもらい、心豊かなまちづくりに繋がれば良いと考えている。

#### 研究者よりの意見

長嶋由紀子氏（共立女子大学他非常勤講師）

・昨年春、アンケートの集計から参加させていただいた。最初のころの議事録を読まさせてもらい、「10年後の富士見市について」を自由に意見を出して議論していたが、これが非常に大切であると感じている。2年前に文化芸術振興条例ができ、このことで市の方針として、文化芸術を長期的に行っていくことが確認された。さらに条例の規定に基づいて策定されたこの計画は10年間の期間を定めており、やはり長期的なスパンで文化芸術を進めて

行くことになる。

この計画が策定された意義は、大きく2つあると考えている。一つは、文化芸術を振興することを市が公共政策としてやっていくうえで、全体像が見渡せるようになったということ。もう一つは、公共政策を実施するにあたって、PDCAサイクル（計画、実施、評価、改善）のスタートラインに立ったということで、大変意義深い事だと思っている。公共政策は、より公平的に、社会の人たちが共有する利益を作っていく事が根底的にある。

フランスのナント市という所の話をするが、製造業が衰退し不況にあえいでいた町が、文化芸術の振興によってまちに活気が出てきたことで、世界的にも知られるまちとなった。ナント市がやったことは、まず大きな方針としてまちに芸術創造の力を取り入れて街を活性化させるということが一つ。もう一つは施策の柱を定めてそれに合わせて事業をあてはめた形をとっている。この事業をあてはめるにあたっては、地域の中を丹念に見て、地域の中の活動や歴史など、政策の方向性を活かすために何が使えるのか、ということをしっかり把握して作られた。この政策が世界的に有名になったのは、PDCAサイクルを何度も繰り返しているところにある。初めの骨格がきちんと実現されているのか、成果は出たかを評価し、次の計画に繋げているということを一貫して25年間実施してきているということにある。

富士見市は条例を定め、長期的に文化芸術でまちを豊かにしていくということが決められており、計画を10年間と定め、その中で評価の機会が設けられており、PDCAサイクルを繰り返していく条件が整っている。これを上手く機能させていくためには、評価やアクションプランなどにも常に市民の人たちが関心を持ち続け、チェックしていく事が大切。

これから事業レベルのアクションプランが出てきて施策の柱の中に位置づけられることで、計画の実効性が担保されるかということが目に見れる形で現れてくる。この委員会の皆さんは、市民の中でも、この計画策定に中核的に関わりを持たれた方たちなので、これからの展開に関心を持ち続けてもらいたい。

李知映氏（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

・私からは日本の行政の計画についてお話しする。日本における行政の計画という物は昭和30年以降に作られた。国レベルの経済政策として展開されていた。特に29年～30年ころの鳩山内閣のころに自立経済6年計画という物があって、計画は行政管理の機能の一つとして行われていた。行政の総合調整、全体のバランスをとることが計画であり、計画というのは今現在の物ではなく、未来の人間行動についてを契約することにあった。

総合計画とはだいたい10年くらいのスパンで作成されることが多く、その下に5年間スパンの基本計画、更には実施計画がある。

初めのころは行政が自分たちの行動を縛るために作られた。その計画も行政や専門家だけで作っていた。最近では市民参加やアンケート、パブリックコメントなどを実施する場合もある。

文化芸術の計画はどのように行われているかというのを、歴史的な流れを見てみると、1990年～2000年ころは施設の建設に向けて計画が作られていた。しかし、自治体の財政の悪化によって財源確保の為に計画の方針が変わっていく事になった。2001年12月に文化芸術振興基本法が制定されたことによって「地方自治体には文化芸術を振興する義務がある」と義務付けられた。2003年には指定管理者制度導入により、計画の必要性が地方自治体の中で高まっていくということがあった。

このような流れの中で、一番大切なのは、文化芸術の定義や計画の定義をどのように置き、その中で基本方針をどのように策定していくのかということだと思う。

今後、この計画を実行していくには、役割分担が必要になる。行政側はできることとできないことがあって、できない部分を市民自らが行うことが大切。この部分は、他の計画ではできない、文化芸術の特有の物であると思う。その次には、施策をどのように進めて行くのか、スケジュールをどのように組むのか、ということもあるが、実行したものをどのように評価していくのが非常に大切である。また、委員から、どの様な仕組みを作ればいいのか、という話があったが、文化芸術振興基本計画というのは、全国で約200自治体で策定されているが、それを実際に実行している自治体は非常に少ないことが現状。今回策定された計画を実行していくために、どの様な仕組みがあるかを考えたときに、今まで文化芸術をやってきた人々が、今まで文化芸術をやっていなかった人々までに影響を及ぼすような仕組みを作ることが大切だと考えている。

中村美帆氏（静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科専任講師）

・私たちが関わったのは、アンケートの集計からであったが、皆さんはその前もその後も関わってきている。計画が出来上がったのはその成果であると思う。計画づくりは安易な方法をとれば、他の自治体で作った計画を下敷きにしてしまえば整ってしまうことも可能かと思う。富士見市はあえてそれをせず、文化に限らず、市民参加を重要視している自治体でもあり、この計画策定については市民一人ひとりに関わり、手間をかけて丁寧に色々な人と話し合っ、色々な人の声を聞いて作ってきた。このプロセスが大事ではないかと思う。

出来上がった計画ももちろんだが、実は計画を作る過程自体が、富士見市の文化行政を考えるうえでとても意義があるものであったと思う。皆さん一人ひとりが手間と時間をかけて参加して下さったことが、大切なことではな

いかと思う。文化の民主主義という言い方を専門用語ではいうが、この計画策定は富士見市の文化芸術を作り上げていくプロセスの一つとして、そこに色々な人が関わっていくということが民主主義として大切であり、評価できるところではないかと考えている。また、アンケートをやらなくて策定する自治体も少なくないのを見ると、回答数は少なかったが、アンケートを実施したということも評価できる部分であり、アンケートで足りなかった地域や若い人においては、ワークショップを実施して声を集める仕掛けを作ったところも、大変意義があると思う。こうしていろいろなところから集めたうえで、様々な団体から推薦をいただいた委員さんや公募の委員さんが熱心に、特に後半はグループに別れて議論を進めてきたが、こうした市民と行政が一体となって進めてきた過程がとても大切だと思う。

今後は、色々な環境の変化の中、どの様な対応をしていくのか、新しい視点をどう取り入れていくのか、また、まだ富士見市の文化芸術に関わっていない方たちをどのように取り入れていくのか、参加してもらうかを考えていかなければならない。

富士見市で、これだけ条例や計画を作る議論ができたのは、もともと公民館等の活動をはじめ、社会教育や生涯学習など、色々な文化団体が活発に活動をしてきたことが大きかったわけで、そこで中心的に活動してきた人が、この委員会の皆さんでもある。こういった、既にコンタクトをとれる人たちは良いが、まだそこに参加する切っ掛けを持っていない人たちがいる。特に「ららぽーと」が出来ると、富士見市の文化団体に関わりを持たない人たちが、富士見市に来訪することになる。そのような人たちに、どのように関わってもらうかを考えていく事も文化の民主主義であり、富士見市の文化芸術を支える「富士見市民」として考えなくてはならないことである。

富士見市の条例を見ると、キラリふじみのことを前面に出しており、指定管理者制度をとっているため、公平性の観点からあまり計画には入れられていないが、キラリふじみの管理運営を受けている以上、キラリふじみの指定管理者は市内の文化芸術関連の重要な団体なので、もう少しつながりを入れても良かったのではないと思う。

この計画を10年間のスパンで見た場合、どこからやっていくのか、という所で見ると、基本目標2の「繋ぐ」かな、と思っている。「繋ぐ」では5つの施策があがっているが、ここで謳われているのは、今までやってきていることの延長だと思う。また、「多様な分野との連携」についても、今まで文化芸術には関わってこなかったジャンルとのきっかけづくりになると思う。その他に、子どもたちの学びの場についても、地域の未来を話すうえで、子どもたちの10年後というのは、一つのわかり易い「例え」になると思う。なるべく早くこの計画について色々な「繋がり」を作っていくと「育む」とか「活かす」に繋がっていくのではないと思う。

この計画は作って終わりではないということになっている。今いる皆さんが中心となって進めて行くこととなる。私も依頼があれば外部からの意見を言うなど、協力していきたい。

(2) 今後の振興委員会について

現在の委員会を任期どおり継続させ、来年1月頃に現在市で策定中のアクションプランの確認をお願いした旨を説明し、了承された。

(3) アクションプランについて

現在、大学研究者の協力の基、富士見市アクションプランの策定作業を行っている旨を説明した。

4 その他

委員より、来年1月に、市内在住のプロの音楽家を集めてオペラコンサートを実施するとの報告があった。

5 閉 会 秋元副委員長

## 第9回富士見市文化芸術振興委員会 次第

日時 平成26年10月30日(木)

18時30分～

場所 鶴瀬公民館第3会議室

1 開 会

2 あいさつ

3 議 事

(1) 富士見市文化芸術振興基本計画について

・冊子の配布

・委員より

・研究者より

(2) 今後の振興委員会について

(3) 富士見市文化芸術アクションプランについて

4 その他

5 閉 会